

コートジボワール：農村の変容(国際ワークショップ 報告要旨)

著者	原口 武彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1989-03
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008694

国際ワークショップの報告要旨

コートジボワール

農村の変容

原口武彦

筆者は、1988年5月からコートジボワール南部のコーヒー・ココア栽培地帯の一農村を対象に、実態調査を行ないつつある。以下は、その調査の中間報告である。

周知のとおり、コートジボワールは1960年の独立前後から「ミラクル・イボワリアン」(象牙の奇跡)と称せられたほどの高度経済成長を70年代末まで持続してきた。この高度経済成長の起動力の一つは、コーヒー、ココアの生産、輸出の順調な増大であった。これらの主要製品の生産を担ってきたコートジボワール農村は、その過程でどのような変容をとげてきたのであろうか。この調査は、その農村の変容ぶりを一農村のレベルで可能なかぎり具体的に、包括的に把握することによって、いわゆる開発の過程で発生するさまざまな問題を発掘することを目的としている。

アウエ村の概況

筆者が今回の調査対象として選択したアウエ村は、この国の経済的首都アビジャン(行政的首都は、1983年、内陸のヤムスクロに遷都された)の中心部からわずか30kmの距離にある人口約2000人の集村形態の村である。

具体的な調査は、1週間に1度(10、11月は2度)、定期的にこの村を訪問し、原則として早朝から午前中、村の様子を観察し、村人たちにインタビューを行なうという方法で行なった(12月末までの訪問回数は45回)。

アウエ村は、17世紀末あるいは18世紀初頭に、

現在のガーナの内陸部クマシ周辺から移動してきたアカン語系グループの一部族、アティエ人が建設した村で、現在の地に定まったのは19世紀後半のことと推定される。それ以降、この村の変容の契機となったと思われるいくつかのできごとを年代順に列記してみよう。

変容の契機

(1) 植民地化——アウエ村が位置するアティエ人居住地域の南部は、19世紀から宣教師団が進出し、そのためフランス軍の進駐自体は平和裡に行なわれた。しかし、それまで頻繁に行なわれていた村ごとの移住は、植民地化によって停止した。

(2) コーヒー、ココア栽培の導入——アウエ村は、コートジボワールで最も早くコーヒー、ココア栽培が導入された地域に属し、すでに両大戦間に当初は強制的なかたちで導入された。しかし、第2次大戦後、農民は積極的にコーヒー、ココア栽培を拡大しはじめた。それに伴って内陸のブルキナファソから外国人農業労働者の流入がはじまる。現在のアウエ村人口に外国人の占める比率は約2割に達するものと推計される。

(3) 1963年から、農業多様化政策の一環として、政府の勧奨によりこの村でもオイル・パーム・プランテーションの造成が開始される。今日では、ココアにつぐ現金収入源になっている。

(4) 1967年に村内に小学校、幼稚園が、村民の拠金と労働奉仕で建設された。現在の小学校就学率は60~70%と推計される。

(5) 1970年、村の電化が行なわれる。今日村内の90戸が(約3割)、主に光源として電力を使用している。

(6) 1981年に、アビジャン市からアレベ市までの自動車道路が、アウエ村のすぐわきを通過して開通した。これによってアビジャン市の北端の町アボボ・ガールまでの車での所要時間は、1時間から15分に短縮された。

(7) 1983年、60年代末にアウエ村の近くに建設されたフランス資本の採石場が閉鎖された。この採石場は、当時100人あまりの賃労働者を雇用し(主にアウエ村民)、アウエ村経済の繁栄に寄与した。反面、この採石場が砂利の洗浄後に流出する土砂が、下流のココア・プランテーションに被害を及ぼし、訴訟問題にまで発展した。

👉 アウエ村の変容

以上に列記したようなできごとを経験する過程で、この村はどのような変容をとげてきたのか。

まず物資の流通に関するかぎり、この村は完全に貨幣経済化しているといつてよい。村内に三つある雑貨屋(一つはモーリタニア人経営)では、フランスパン、輸入米、ビール、ワイン、清涼飲料水なども販売している。ディスコ・バーが2軒、あばら屋づくりながら、コーヒー・ショップ、農業労働者を対象にした飯屋もある。毎日、パーニュ(婦人衣用のプリント綿布)を頭にのせた数人の行商人がこの村を訪れる。またアビジャンの漁港から、冷凍魚を満載した小型トラックが、この村にも立ち寄り、数万フランの売上げを上げている。

このような貨幣経済の浸透を拒否している唯一

のものは土地である。アティエ社会の伝統にしたがって、この村のアティエ人は六つの母系クランのいずれかに属し、村の土地はこの六つのクランおよびその下部単位に占有されている。この土地はいまだ商品の対象となつたことはない。これがコーヒー・ココア栽培の導入以来、流入してきた外国人出稼ぎ労働者に対して排他的なかたちで、この村落共同体が今日も維持されている物的基盤になっているといえよう。各アティエ人が占有するプランテーションの規模は、相続と各自の開発努力の差異によって、すでにかかなりの格差が生じており、またこの村にはさらに開拓可能な処女林は残っていない。それにもかかわらず、先祖伝来の土地をとくによそ者に売買することはタブー視されている。

村の政治に関しても、よそ者は構造的に排除されている。すなわち、この村は上記の六つの母系クランの代表者と、三つの世代グループの代表者(四つある世代グループのうち第4世代は未成年グループ)からなる長老会が、指導者世代から選ばれた村長を囲んで、村の政治を司るという伝統的体制をまだ維持している。

この村の開発の過程で、これだけ多くの異質な要素(外国人労働者、キリスト教、イスラム教、ハリス教の伝播、貨幣経済の浸透)をとりこみながら、この村は今日なお、アティエ人の六つの母系クランの村というかたちを維持している。この基本的矛盾は、どのようなエネルギーを今後の発展過程で生み出すことになるのであろうか。

(はらぐち・たけひこ/在アビジャン海外調査員)